

平成 30 年度 大台ヶ原自然再生推進委員会  
森林生態系・ニホンジカ管理ワーキンググループ（第 1 回）  
議事概要

### 1. 開催日時

平成 30 年 11 月 20 日（火）13:30～17:00

### 2. 開催場所

OMM ビル 8 階 環境省近畿地方環境事務所 大会議室

### 3. 出席者

#### 【委員】

氏 名	所 属	役 職	備考
木佐貫 博光	三重大学大学院生物資源学研究科	教授	
佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館	学芸課長代理	欠席
高田 研一	高田森林緑地研究所	所長	
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科	講師	
鳥居 春己	奈良教育大学自然環境教育センター	特任教授	
日野 輝明	名城大学農学部	教授	欠席
松井 淳	奈良教育大学教育学部	教授	
村上 興正	元京都大学理学研究科	講師	
八代田 千鶴	国立研究開発法人森林総合研究所関西支所	主任研究員	
横田 岳人	龍谷大学理工学部	准教授	

※五十音順

【オブザーバー】

所 属	役 職	氏 名	備 考
近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課	企画官（自然再生）	積 正治	
近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課	野生鳥獣管理 指導官	淵上 弘文	
奈良県 農林部農業推進振興課	主任主事	中谷 元彦	
上北山村 地域振興課	主事補	更谷 亮太	
奈良県猟友会 上北山支部	副支部長	新谷 五男	欠席
一般社団法人 自然環境研究センター	主席研究員	千葉かおり	
	主席研究員	荒木 良太	
	研究員	日名 耕司	
	研究員	中田 靖彦	
株式会社 環境総合テクノス	環境部 マネジャー	樋口 高志	
	環境部	吉岡 憲成	

【事務局】

所 属	氏 名
近畿地方環境事務所 国立公園課長	榎本 和久
野生生物課長	澤志 泰正
生物多様性保全企画官	蒲池 紀之
自然再生企画官	竹下 守昭
野生生物課 野生鳥獣感染対策専門官	戸田 博史
吉野自然保護官事務所 自然保護官	関 貴史
吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐	小川 遥
株式会社 応用生物 主任研究員	草加 速太
研究員	稲田 敏昭

#### 4. 議事内容

- (1) 平成 30 年度ニホンジカ個体数調整及び生息状況について
- (2) ニホンジカの効果的な捕獲計画の検討について
- (3) ニホンジカと植生の相互関係モニタリングについて

#### 5. 議事概要

##### (1) 平成 30 年度大台ヶ原ニホンジカ個体数調整及び生息状況について

- ・カメラトラップ調査はニホンジカの季節変化がわかり、捕るべき場所を調べるのに貢献してきたと思うが、カメラの年間の稼働率について、年当たり 25%は故障で使えなくなるのか？（委員）  
→当該カメラの耐用年数は約 4 年のため、4 年に 1 回は新品を投入しているとともに、大台ヶ原は冬場の積雪の中で設置されること、降水量が多いことなどで、故障の点検を行い、修理可能なものについては直して使っているが、だいたい年間 20~30 台ぐらいは交換している。（事務局）
- ・平成 28 年から平成 30 年にかけて、わなの空はじき率が倍増しているが、なぜ、そのような差が出たのか（委員）  
→今年はシカがわなを踏んだが作動しなかったというものが感覚的に多かった。メーカーに聞いたところ、バネの種類などの規格を変えたということであった。その影響が出た可能性がある。また、今年は台風が多かったり、雨が多かったりしたため、天候の影響もあるのではないかと思う。（事務局）
- ・作動しないというのは、踏み込んだ痕はあるが、作動しなかったということか？（委員）  
→そのような状態である。原因としてはメーカーによる仕様の変更によるためかもしれないため、別のわなを探すことを考えている。マニュアルでは、わなの短径 10 cmとされており、そのようなわなは商品として少ないが、新たに見つけたため、今後はそれを試そうと検討している。（事務局）
- ・わな猟は捕獲のプロに 1 回きちんと教えてもらった方がいい。どこにどう気を付けるとか、長年、わな猟をやっている人から、しっかりレクチャーを受けた方がいい。（委員）
- ・足くくりわなの CPUE が年々低下している。これは、わなに対する馴れが出てきたと考えざるをえないのか？この傾向が続くのであれば、今後とも足くくりわなを用いると、CPUE はさらに低下するのだから、足くくりわなの数を増やしても難しいのではないか？（委員）
- ・クマが出たからいい場所で捕れなくなったという話になるのか、それとも実際にシカがわなに馴れてきたためにそうなったのかで意味は全然違う。そういう解析が必要。（委員）
- ・カメラトラップによる月別の生息密度と捕獲はパラレルか？（委員）  
→CPUE と REM 法の生息密度との関係でみると、生息密度が増加する 7 月、8 月に CPUE が低下する真逆の結果になっている。（事務局）

##### (2) ニホンジカの効果的な捕獲計画の検討について

- ・くくりわな等の捕獲効率を上げるためには、シカの動きに合わせた方法が良い。シカは防鹿柵の中に餌があることをわかっているなのでその周りを中心に狭い範囲でよく歩く。このような場所にわなをかけると効率的と思う。次善の策として、保全対象の重要度評価をし、高評価の場所を重点的な捕獲対象にするという考え方である。基本的には捕獲の多寡にかかわらず、保全対象が守れたらいいという考えである。保全対象として重要性の高いところは、森林が後退している所、希少生物が生息あるいは希少な群落が成立している所、

シカの季節移動の主要なルートになっている所、土壌が裸地化して、エロージョンが発生している所、森林の後継樹があってもおかしくないところに後継樹がない所などである。森林保全するという観点からどこで捕獲するか、どこに捕獲するための努力量を集中するべきかを考えるべきと思う。(委員)

・クマの放獣について、捕まえた個体は「学習放獣」するということを書くべき。(委員)

・捕獲実施について、いくつか提案がある。1点は首輪式についても、4月から始めた方がいいと思う。今年度、首輪式の捕獲では、9、10月が幼獣ばかりだったことを踏まえ、4、5、6月のオスの角のない時期に集中的に首輪式を実施する。それは出産前の捕獲にもつながる。7、8月は捕獲が難しいため基本的に予備期間とされているが、状況をみて休止にし、その後、9、10月の繁殖期はオスが移動し、それに対応してメスも移動が多くなることから、その時期にもう一度足くりわなを実施する。もしオスの空はじきが多いのであれば、ネット式の囲いわなを秋口に実施する。今年度も連携捕獲で実施している囲いわなでは、10月ぐらいにオスが多く捕れた事例があるため、オスが捕獲しやすいと思う。以上のように月によって捕獲方法を変えろというのが1点。もう1つの提案は、銃捕獲も検討する必要があるということ。安全性の面もあって、躊躇されたと聞いているが、登山者がまだ入らずドライブウェイがまだ開通していない時期等はシカも餌に誘引されやすいと思うので、そのような所で給餌場を作って、銃猟や移動式の銃捕獲を実施する。CPUEの低下はわな捕獲を実施している場所が毎年大体同じためではないか。クマの問題もあるが、銃捕獲は機動力もあるため、検討して頂きたい。(委員)

→次年度の方向性については近年目標生息密度を5頭/km<sup>2</sup>未満にするとして計画してきたが、そのためには一番レベルが低い値でも211頭捕獲しなくてはならない。この数字は現在、錯誤捕獲対策のマニュアルもあるため厳しい。事務局としては、第4期のシカの管理計画が残りあと3カ年あるので、3カ年で5頭/km<sup>2</sup>を達成したいと考えている。(事務局)

### (3) ニホンジカと植生の相互関係モニタリングについて

・「食痕履歴法」によれば、シカ出現の有無は食痕の外部形態を観察することで明らかにできる。普通の人も1日のトレーニングで3年までは遡れ、プロフェッショナルになると10年は遡れる。リョウブとかの樹種は萌芽するが、そういう萌芽個体をGPSで位置情報を取りながら徹底的に調べたら、少なくともこの場所ではここ何年来ていない、この場所では何年前に来たということはかなり精密に判定することができる。(委員)

・この調査はシカの影響をみるのではなく、個体数調整の結果、植生がどう回復しているのかをみるもので、シカの生息密度が5頭/km<sup>2</sup>以下になって今後植生が回復段階に入る、その回復の程度をどのように評価するかを目的に考えたものだ。現在のシカの頭数は、目標の5頭/km<sup>2</sup>をはるかに超えているため、今、緊急にそのやり方を検討しなくてもいい状況になっている。(複数委員)

→シカの侵入初期であれば、食痕履歴法は有効だと思うが、大台ヶ原の周辺でそのような場所があるかと言えば、ない状況にある。この調査の検討がもう足かけ2年目なので、事務局としてはWGとして何か一定の結論というか方向性を是非とも出していただければと思っている。(事務局)

以上